



図20 プラサ・デル・インカの東端の部屋状構造物と奥にレンガ造りの建物

り、西端には植民地時代のもと思われるレンガ造りの高い建物が確認された(図20)。ペルー文化省によって登録されている名前にインカとあるが、インカ帝国の広場は通常、建物に囲まれた方形のものである(Hyslop 1990: 234)。従って、六角形でかつ濠で画定されているという構造は非常に珍しいものであり、インカ帝国の広場としては特殊な形態のものと言える。その周囲には典型的なタンプに見られるような特徴の建造物は全く確認できず、これがタンプないし行政センターであったとは言い難いものであった。

これより先にはインカ道からほど近い距離に石の囲いがいくつか散見された。そしてマシュゴンガ山の東麓まで至った。

## ⑥ マシュゴンガ (Mashgonga)

標高：4164m

座標：8°23'08.86" S 77°58'29.92" W

面積：166438.29m<sup>2</sup>

土着の民話において祖先の神性が宿る地域を守る山とされ、カバーナ付近のレクワイ文化の遺跡であるパシャシュ (Pashash) の人々はその山頂を高地の牧民と低地の農民を結ぶ聖なる場所と捉えていたという(Lau et al. 2023: 52)。遺跡自体は後期中間期のものとされる(Lau y Wegner 2023: 1)。遺跡は山麓が石壁で大きく囲われており、その中で西や北の斜面に方形の部屋が密集し、頂上部には囲いと基壇があるという構成である(図21)。部屋群の壁は石材とモルタルでできており、それほどの高さはなかった(図22)。頂上部の囲いの中の基壇は部屋状構造であった可能性があるが、はっきりとした概形を捉えることができなかった(図23)。頂上部は儀礼を行うような空間であり、山腹部の密集していた部屋はその他の活動を行うといった区分けが行われていたと推測される。



図21 マシュゴンガ航空写真



図22 マシュゴンガ西麓の部屋群南向き



図23 マシュゴンガ頂上部の基壇

## 5 プラサ・デル・インカ周辺

先述の通り、本対象地域は接近が困難な地理的環境にあるため、周辺に位置する保存状態の良好な以下の遺跡群についても併せて踏査を実施した。具体的には、プラサ・デル・インカから1.1km北東の山の上にあるチュカーナ遺跡(図24、25)とマシュゴンガ山から北西方向45°に連なる山々の上に存在する遺跡群である。

### ⑦ チュカーナ (Chucana)、チュカーナ・アルト

標高：3679m

座標：8°21'28.30" S 77°57'36.92" W

面積：9991.24m<sup>2</sup>

先述の巡察記録では、植民地時代初期当時にコルカリアスの管轄下にあった集落とされている(Espinoza

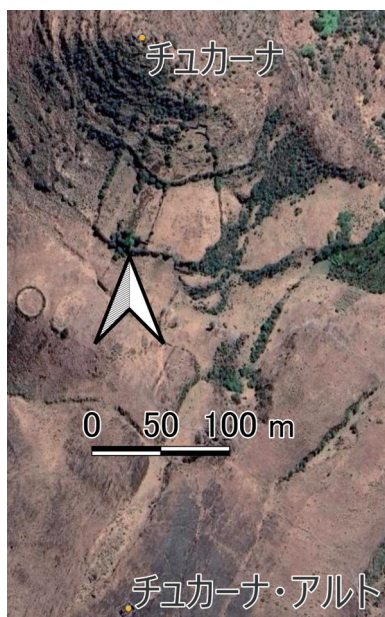


図24 チュカーナの航空写真



図25 チュカーナ遺跡北向き



図26 チュカーナ遺跡の台形の壁龕



図27 チュカーナ遺跡頂上部の部屋を仕切る台形の戸口



図28 チュカーナ・アルトの部屋状構造物の外観

Soriano 2013[1974]: 557, 560)<sup>8</sup>。遺跡自体はインカ帝国期のものとされており (Lau y Wegner 2023: 1)、実際にインカ帝国の建築的特徴の一つである台形の壁龕が確認できる (図26)。山を三重の石壁で囲っており、最長部には丸い部屋状構造物があり、中央に戸口を設けた壁が空間を南北に仕切っている (図27)。

チュカーナから407.46m南にあるもう一つの山の麓には遺構があり、チュカーナ・アルトという遺跡名で既に文化省によって登録されている (図28)。こちらは北東を入り口とした縦8.62m×横5.1mの囲い(55.62m<sup>2</sup>)の中に縦4.55m×横2.77mの部屋状構造物(12.11m<sup>2</sup>)がある。部屋の入り口はそのまま北東にある。部屋の壁は1.6mほどの高さで残っており、屋根は切妻であった。部屋の中央には仕切り壁があるが、奥へのアクセスは容易である。また、チュカーナとチュ

カーナ・アルトの間には直径20mの円形の囲いが確認された。

#### ⑧ カスティリョ・デ・フェレール (Castillo de Ferrer)

標高：3850m

座標：8°20'58.56" S 78°00'18.81" W

面積：4303.88m<sup>2</sup>

クチュパイコ (Cuchupayco) の丘の頂部を石壁が囲うように建設された集落である (図29、30)。石壁は二、三重に囲われており、麓部分では囲い壁を用いて部屋を形成していた (図31)。壁は高いところで2mほどの高さで残っており、石をモルタルで固めて造られていた。密な植生に阻まれ、遺跡の細かい構造を捉えることができなかった。表面には多くの土器片が確認さ

<sup>8</sup> ポンセ・デ・レオンは記録上、1543年の9月7日と9月9日にチュカーナを訪れたといい、それぞれ5人と45人のインディオを確認しているが (Espinoza Soriano 2013[1974]: 560)、これが同じ集落であるか、チュカーナとチュカーナ・アルトの違いであるのか、あるいは別の当時チュカーナと呼ばれる集落のことを指していたのかといった詳細は定かではない。

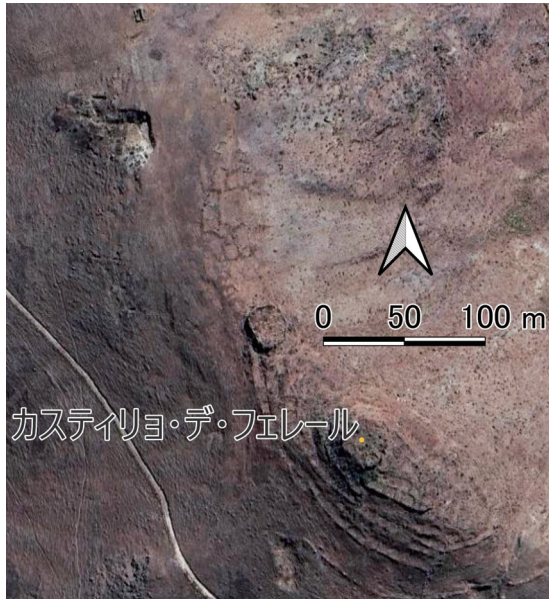


図29 カスティリョ・デ・フェレールの航空写真



図32 カスティリョ・デ・フェレール北西にある円形構造物の外観南向き

れたが、粗製のものが多く、特定の時代・文化の証拠となるものを確認できなかった。丘の頂部にあるという立地から集落の防御的な性格が窺え、レクワイ文化あるいは後期中間期の遺跡と考えられる。

頂上部には小さな石を積み重ねたものが確認できた。これは一般的にアパチタと呼ばれる旅人たちが石などを近くの聖なる山を模す形で積み重ねていた場所と考えられる (Dean 2010: 55-61, 96-98)。ここでは石のみが積み重ねられており、近くにある聖なる山としてはマシュゴンガが該当することから、インカ帝国期の旅人がここで祈りをささげていた可能性が指摘できる。

遺跡の本体から54.88m北西に直径20mほどの円形の構造物がある(図32)。周壁は高さが2.5mほどある。この壁は大きな石の間に小さな石を敷き詰めてモルタルで固めて造られており、この技法は古くから存在していたことから (Lau 2016: 102)、インカ帝国期以前に建設された建造物である可能性が高い。内部は密な



図30 カスティリョ・デ・フェレールの外観南向き。頂上で石が積み重ねられているのが見える。



図31 カスティリョ・デ・フェレールの囲い壁を用いた部屋



図33 円形構造物のさらに北にある部屋状構造物

植生に阻まれ、詳細な構造が分からなかった。

この北の円形構造物からさらに190.63m北西に部屋状構造物がある(図33)。壁は1.5mほど残っており、石をモルタルで固める形で造られていた。屋根は片流れとなっており、東側の壁が西側のものよりも高かった。

#### ⑨ クンガシュA (Cungash A)

標高：3900m

座標：8°21'55.14" S 78°59'51.50" W

面積：10671.24m<sup>2</sup>

プラサ・デル・インカから3243.66m西にある。丘の斜面に沿って頂上を囲うように部屋状構造物が並んでいる(図34, 35)。西には円形のもの(直径4.73m)、東には方形のもの(4m×4m)が並んでいる。これらの部屋には下の部分に通気口が確認され、内部の空間を換気していたことが想定されている。これはインカ帝国の他の遺跡で確認されている倉庫(コルカ)の構造である可能性がある (Morris and Thompson 1985:



図34 クンガシュ A 遺跡の航空写真



図35 クンガシュ A 遺跡の頂上部



図36 ペドロロンドの航空写真



図37 ペドロロンド (カスティリョ)



図38 ペドロロンド (セクター A) の構造物



図39 ペドロロンド (セクター B) の構造物

97-106)。しかし、丘を全面的に囲う配置、そして近くに大きな行政センターがないという立地は非常に珍しいものである。丘の頂部にも建造物らしきものは確認できたが、密な植生に阻まれ、はっきりとした構造を捉えることはできなかった。

丘を東におりたところにクンガシュ B 遺跡があるが、一つの囲いを除いて特筆すべき遺構を確認することができなかった。

#### ⑩ ペドロロンド (Pedrorondo)

標高：3801m

座標：8°21'05.41" S 77°59'54.77" W

面積：4079.45m<sup>2</sup>

登録上、セクター A、B、カスティリョに分けられている (図36)。メインとなるのはカスティリョであ

り、記した座標はカスティリョのものである。カスティリョのペドロロンドは他のインカ道から外れた場所にある遺跡と同様に丘の上を3段の石の擁壁で囲うように集落が築かれているが、丘自体の高さは比較的低い (図37)。頂上部には基壇があった可能性があるが、密な植生に阻まれ、詳細は分からなかった。丘の頂部にあるという立地からレクワイ文化または後期中間期の遺跡である可能性が高い。

セクター A は西に175.28m、セクター B は南に229.56m カスティリョから下ったところにある。どちらも2つの部屋からなる構造物で、壁龕が確認され、石をモルタルで固めた1.5mほどの壁で造られている (図38、39)。



図40 遺跡4の航空写真



図41 遺跡4

#### ⑪ 遺跡4

標高：3889m

座標：8°21'44.69" S 78°00'02.96" W

面積：5662.26m<sup>2</sup>

クンガシュAから468.919m北西にある丘の上にある遺跡である(図40)。低い周壁で囲われており、その中を石壁で区画に分けている。実際の遺跡の表面からも残っている壁は低いものの、壁によって多くの部屋に分けられていることは分かる(図41)。表面からは土器は確認することができず、どの時代の遺跡であるかを確認することができなかった。丘の頂部にあるという立地からレクワイ文化または後期中間期の遺跡である可能性が高い。

#### ⑫ 遺跡5

標高：3890m

座標：8°21'27.65" S 77°59'58.91" W

面積：7962.75m<sup>2</sup>

カンパナリオ(Campanario)の丘の頂部を石とモルタルでできた壁が囲うように建設された集落である(図42)。表面からは土器片が確認できたが、その特徴からどの時代の遺跡であるかを特定することはできなかった。遺跡自体は全体的に残っている壁が低く、構造を捉えることができなかった(図43)。丘の頂部



図42 遺跡5の航空写真



図43 遺跡5表面

にあるという立地からレクワイ文化または後期中間期の遺跡である可能性が高い。

#### 6 マシュゴンガ〜トゥクトゥバンバ湖とその周辺

マシュゴンガを越えると、ラングラ河に向かって標高が下がり、川を越えるとまた上り坂となり、再び標高4000mほどの平原に出る。文化省の報告通り(Instituto Nacional de Cultura 2004: 51)、グーグル・アースの航空写真から多くの囲いを確認できる。この区間では道沿いに目立った遺跡は一つしか確認できなかったが、少し離れたところには大きな特徴的な囲いから成る遺跡が確認されたため、併せてここで報告する。

ラングラ河からインカ道を3kmほど進むと道沿いに粗石積みの遺跡がある。

#### ⑬ 遺跡6

標高：4239m

座標：8°24'29.92" S 77°59'42.63" W

面積：322m<sup>2</sup>

サンタ・ロサの山の東麓を通るインカ道沿いの遺跡である(図44、45)。南北12.12m×東西15.70mの囲いがあり、囲いの北側と東側に部屋が付随している。壁は1.5mの高さで残っている。北には南北4.85m×



図44 遺跡6の航空写真



図45 遺跡6 外観



図46 遺跡6北の部屋のうち東にあるもの



図47 遺跡6西にある囲い



図48 遺跡6西の囲いの南西角にある部屋



図49 遺跡6と囲いの間にある石壁列

東西2.61mの部屋が囲いの北西角から4.21mの位置に一つ、3mの間隔をあけてもう一つ配置されている。北にある部屋のうち、東にあるものは西に入口があり、東壁に壁龕が確認された（図46）。東の部屋はほぼ東壁全てにわたる形で東西11.22m×南北3.85mの大きな部屋が配置されている。囲いの南西角から南西方向に17mのところには部屋状構造物らしきものが確認されたが、損傷が激しく概形が分からなかった。

遺跡6から218.05m西に大きな囲いがある（面積：3834.32m<sup>2</sup>）。西側の一边が73.74mの直線で、その一

辺を歪な160mの曲線が囲うように囲いが形成されている（図47）。壁の高さは場所によってまちまちであり、高いところで2.5mほどあった。南西の角には部屋状構造物が内接している（図48）。中央を52.69mの壁で区切っている。しかし、航空写真からは西の一边の壁列の西に長方形の囲いがあったような痕跡が窺え、現在こうして見られる囲いはこのオリジナルの長方形の囲いを改変したものである可能性がある。

航空写真からは確認できないが、遺跡6と西の囲いの間には石壁が残っており、何らかの構造物が遺跡6と囲いの間にもあったことが窺える（図49）。

この遺跡はカンチャや精巧な石組みといった分かりやすいインカ帝国の建築的な特徴を備えていない。高地の粗石積みの建造物については現代のアンデスにおいて、集落から一定の距離にあり家畜と1日宿泊するエスタンシア（estancia）という施設が民族誌で報告されており（Moore 2021: 105, 183）、この遺跡はエスタンシアであった可能性が考えられる。



図50 遺跡7の航空写真

一方で、インカ道沿いに位置していることやポンプ遺跡やトゥンスカンチャ遺跡のように (Morris and Thompson 1985: 110–113)、粗石積みで必ずしも全てのインカ帝国の建築的特徴を備えていない場合でもインカ道上にあるタンプとしてみなされる遺跡もあることから、この遺跡もタンプであったとも推測される。実際、遺跡で確認できた壁龕は本来、インカ帝国のデザインである台形であった可能性が示唆される。また壁厚 (約80cm) も崩落状況から2列構造であったことも否定できない。このように建築から見ても全てではないものの典型的なタンプで見られるようないくつかの特徴が示唆されることから、タンプであった可能性は高い。

#### ⑭ 遺跡7

標高：4253m

座標：8°24'55.44" S 77°57'40.81" W

面積：5059.73m<sup>2</sup>

山の裾野にある粗石積みの遺跡である。インカ道からは1656.938m西にある。1.8mほどの高さの壁の南北59.47m×東西73.89mの大きな囲いの中に、南西角に東西34.76m×南北41.30mの囲いがあり、その南部分を幅8.46mで東西に壁が建てられ長方形の部屋を構成している (図50、51)。内側の囲いの南東端から22.3m東に部屋状構造物がある。寸法は南北壁4.11m×東西壁5.34mであり、切妻屋根の構造となっている (図52)。



図51 遺跡7の外観



図52 遺跡7東にある部屋状構造物

チュカーナやカスティリョ・デ・フェレールのように、遺跡の近くに単一の部屋状構造物が外側の囲いから126.22m南に配置されている。表面からは土器が確認されず、インカ道から外れた山の麓にあるという立地から遺跡の時代を特定することはできなかった。

## V 考察

コンチューコス領域北部のコルディリエラ・ブランカの東西両側の高地それぞれでインカ道②、①が通っており、その周辺にて多くの遺跡を確認することができた。そして、その配置にはそれぞれ何らかの特徴が垣間見えた。

本稿の調査範囲において、最も特筆すべき点はコルディリエラ・ブランカ東西両側の高地において、インカ道沿いに行政センターが確認できなかったということである。周囲の領域を見てみると、既に述べた通りワマチューコ、ワイラス、シワス、ピスコバンバは現在のその名前の町がかつての行政センターであったとされ、他のアンカシュ県高地の領域にもワリタンボ、ピンコスタンボなど現在でも残っている行政センターがある。それぞれウスヌや倉庫などインカ帝国の建造物が確認されていたり、現在の町の大きさからインカ帝国当時の施設の行政センターとしての規模を想定できたりするが、今回の調査範囲であるコンチューコス領域北部においてはそのようなものは見受けられなかった。今回の調査の起点であるコンチューコス市は

16世紀にスペイン人たちによって近くの銀山を開発するために造られた村であり、インカ帝国期からタンブとして存在していたわけではなかった (Espinosa Soriano 2013[1974]: 547)。

コンチューコス市からタブラチャカ河にかけての範囲においては、コンチューコス河に沿う形でインカ道②が通り、それに伴って遺跡1や遺跡2が確認された。山に囲まれたこの区間では平坦な広い土地がなく、遺跡自体の規模は小さなものであった。また、コンチューコス領域のコルディリェラ・ブランカ東側の全域において、川沿いにインカ道②が続いているというわけではない。コンチューコス市から南にインカ道を進むと、徐々に河から西に逸れて、山の斜面を登っていき、標高4473mの平原でパリアチューコのタンブにたどり着く。このタンブは長方形建造物やカンチャなどインカ帝国の建築的特徴が航空写真からもはっきりと窺えるある程度の規模の遺跡である (Espinosa 2002: 91)。しかし、倉庫やウスヌといったインカ帝国の行政センターで確認されるような建造物を備えておらず、規模からみても、パリアチューコがインカ帝国の行政センターであったとは言い難い。コンチューコス市以北と以南のインカ道②において、環境帯やそれに伴った遺跡の規模に違いはあるが、河沿いから山の斜面にインカ道が移る場所に遺跡1があり、ワマチューコとコンチューコスという2つの領域の境目となっているタブラチャカ河の対岸に遺跡2があり、高地平原にあるパリアチューコもコンチューコスとシラスという2つの領域の境目にあることから所々のインカ道②の要所をおさえて施設が配置されている様子が窺えた。従って、これらの施設の役割はあくまでも交通の制御がメインであり、これらの施設を当時行政センターとして、その周辺にいたインカ帝国期の住民が実際に赴いて国家事業に従事したり、国の主催する饗宴に参加したりしていたとは考え難かった。国家に関わる活動はそれぞれの集落で行われていたと考えられる。

タブラチャカ河～マシュゴンガまでの範囲では南北の河川は存在せず、タブラチャカ河やワンドバル河のような東西の河川を縦断する形で大きな高低差を伴いながらインカ道①が南北に伸びていた。インカ道①沿いに遺跡3、多くの小さな部屋状建造物、高原に出て、マシュゴンガに至るまでにオゴパンパ貯水池、プラサ・デル・インカが確認できた。これらはインカ帝国のものであると考えられるが、どれも典型的なインカ帝国の建築的特徴をはっきりと窺えるものではなかつ

た。プラサ・デル・インカは住民を集め、国家と臣民を結ぶ饗宴や儀礼を行うための大きな広場として想定されるが、そこは広場のみであり、インカ帝国の行政センターで確認できる大きな長方形建造物やウスヌなど、その他の国家事業を行うような施設は確認できなかった。なお、六角形で、濠で囲われているという広場の構造は、通常のインカ帝国の広場としては珍しいものであり、これは典型的なインカ帝国の広場ではなく、在地の信仰を取り込んだ儀礼空間であった可能性がある。そこには人口密度が低く壮麗な国家儀礼を行えなかったことに加えて、近隣に古くからの信仰の対象であったマシュゴンガ山があることから、インカ帝国が土着のエリートとの利害関係を鑑みて、彼らの元々の信仰を尊重していた可能性が考えられる。

また、インカ道から外れたプラサ・デル・インカ周辺にある山頂部にはチュカーナ、カスティリョ・デ・フェレール、ペドロロンドのカスティリョ、遺跡4、遺跡5が確認された。これらの遺跡は近くにペドロロンドのセクターA、Bやチュカーナ・アルトのような部屋状建造物を伴っていた。このような単純な部屋の構造の建造物はインカ帝国の建築的特徴として知られており (Gasparini and Margolies 1980[1977]: 160-178; Kendall 1985: 13-14; Hyslop 1990: 5-7)、これらはインカ帝国のものであった可能性がある。また、カスティリョ・デ・フェレール遺跡ではアパチタが確認され、土着の信仰を尊重する証拠はここでも確認された。なお、クンガシュAやチュカーナなどインカ帝国の特徴が窺えるような遺跡もインカ道から外れた周辺にあった。このようにインカ帝国の影響はインカ道沿いの遺跡ではなく、むしろその周辺の遺跡に強く表れている様子が窺えた。

マシュゴンガ～トゥクトゥバンバ湖にかけての範囲においても、遺跡の配置はタブラチャカ～マシュゴンガと同様の傾向が窺えた。道沿いにタンブと思われる遺跡6があり、周辺により大きな遺跡である遺跡7が確認された。

ここからトゥクトゥバンバ湖～タブラチャカ河の範囲についてまとめると、インカ帝国は遺跡3、いくつかの小さな部屋状建造物、遺跡6といった簡単な行政施設と考えられるものをインカ道①沿いに構えつつ、山頂部にあるインカ帝国以前の集落を部屋状建造物あるいはクンガシュAのような近隣の施設から監視・統御する形で行われていたと考えることができる。

コルカリヤスの管轄するワランガの地理的範囲は特

に領域の面積が他のコンチューコスの人々のクラカたちのものと比べて広く、リヤクタ数も多かった。よって、相対的にコンチューコス領域内部でも人口密度が小さかったと想定でき、遠い場所から住民を集めることが現実的でなかったことが考えられる。

また、ほとんどの丘上にある集落が標高3800mを超える場所であり、農作物の生産が期待できなかったこともセンターを敷設しなかった大きな要因となっていると考えられるだろう。実際、ワマチューコのように外部からミトマクーナを導入するようなことは巡察記録から確認できなかった。

このような背景からコルディリェラ・ブランカの東西両側の高地において、コルカリヤスの管轄下にあった住民を居住地から遠いインカ道沿いのセンターに召集して国家事業に従事させるのではなく、インカ帝国が直接、以前からあった人口密集地をそれぞれ個別に監視して統治することで支配を効率化していたことが推測される。

以上より、コンチューコス領域北部におけるインカ帝国の支配は、大規模行政センターを中心とした集約的な統治ではなく、インカ道上の小規模施設による交通管理と、既存の在地集落を個別に監視・統御する分散的な統治であったと考えられる。

## VI おわりに

大規模なセンターのある場所では、そこに領域の住民を集めて、生産活動や饗宴活動に参加させることで統治を行っていたと想定される。それに対し、コンチューコス領域北部は散在していた住民をそれぞれ個別に統治していたことが今回のデータにより示唆された。インカ帝国の地方支配は一般的に首都クスコから離れば離れるほど土着の領主の権限が強くなり、国家の支配力は弱まっていたとされる (D'Altroy 2015: 351)。しかし、それは一律的なものではなく、それぞ

れの土地の事情に合わせた様々なヴァリエーションがあったことが知られている<sup>9</sup>。

コンチューコス領域北部は人口密度が低く、高地や川沿いの土地の狭さからあまり生産的でなかったことから、帝国の辺境域でない場所で、①、②の2つの高地のインカ道が通る重要な位置にあったにも関わらず、行政センターを構えずに個別に集落を統御していた様子が窺えた。もっともチュパチョの事例のように (Grosboll 2013: 44–73)、土器など何かしらの物品をこれらの土着の高地集落で生産していて、ワイラスやワマチューコなどの近くのセンターに供給していた可能性も否定できない。いずれにせよ、今回の山頂に位置していた遺跡は全て発掘が行われておらず、今後の調査によってヤイノ遺跡のように (Lau 2019: 159–179)、具体的なインカ帝国との関係が浮かび上がってくる可能性もある。

コンチューコス領域の南部についても明らかになっていることは少なく調査すべきことは多い。同様に遺跡分布を調査することでアンダマルカのルカナスの事例のように (Schreiber 2013: 77–116)、同じ領域であっても環境帯の違いから支配構造が違うことや、アルゼンチンやボリビアの事例のように (Acuto 2010: 108–150; Casanovas 2010: 151–172)、クラカごとにインカ帝国との関係が異なっていたといったことが明らかとなる可能性もある。将来の更なる調査によってコンチューコス領域全体の支配構造を明らかにし、ひいてはアンカシュ県南部のオクロス領域を同様に調査していくことで、アンカシュ県高地全体のインカ帝国の支配の構造を理解することができるだろう。

## 参考文献

(日本語文献)

シエサ・デ・レオン

2007[1553] 『インカ帝国地誌』増田義郎 (訳)、岩波書店。  
フォン・ハーゲン アドリアナ

2024[2015] 「タンボ」大平秀一 (訳) 『インカ百科事典』

<sup>9</sup> ワマチューコ (Huamachuco) ではミトマクーナが細かく配置された上で行政組織が再編されたことが確認されている (Topic and Topic 2013: 17–43)。ワヌコ (Huanuco) のチュパチョでは中央の施設は小規模であるにもかかわらず、大規模な人員の移動が行われ、行政単位が再編され、資源や工芸品生産を統制し、近くの行政センターであったワヌコ・パンパや首都クスコに物資を供給していたことが確認されている (Grosboll 2013: 44–73)。アンダマルカのルカナスでは領域内部で社会構造の複雑性や資源の偏りがあったことから、同じ領域でもインカ帝国が一律に支配していたわけではないことが報告されている (Schreiber 2013: 77–116)。遠隔地であっても多くの違いが見受けられる。エクアドル北部では交易ネットワークを維持するために、土着のエリートの聖域を残して尊重しつつ、支配を浸透させた一方 (Lippi and Gudino 2010: 260–278)、南の軍事前線であったチリ南部では要塞や道路の建設が積極的に進められており、遠い場所でも弱い統治が行われたわけではない例も知られている (Rossen et al. 2010: 14–43)。また、ボリビアやアルゼンチンの高地では同じ民族集団内でもインカ化して利益を享受するエリートとインカ帝国の支配に抵抗するエリートに分かれるという内部差も確認されている (Acuto 2010: 108–150; Casanovas 2010: 151–172)。

- ゲイリー・アートン、アドリアナ・フォン・ハーゲン（編）、大平秀一（監訳）、岡田年正、森下壽典（訳）、pp. 281–282、柊風舎。
- ブライ タマラ・L
- 2024[2015] 「国家の催す祭宴」岡田年正（訳）『インカ百科事典』ゲイリー・アートン、アドリアナ・フォン・ハーゲン（編）、大平秀一（監訳）、岡田年正、森下壽典（訳）、pp. 183–185、柊風舎。
- ヘレス フランシスコ・デ
- 2003[1534] 「第一部 パナマよりカハマルカまで」『インカ帝国遠征記』フランシスコ・デ・ヘレス、ペドロ・サンチョ（著）、増田義郎（訳）、pp. 8–137、中央公論新社。
- 南 智博、吉川 主浩
- 2025 「古代アンデス帝国社会—ペルー北部、アンカシュ県山岳部における問題—」『南山考人』53: 3–26。
- 渡部 森哉
- 2020 「アンデス山中に残る古道」『月刊 みんなく』12: 10–11。
- 2024 『インカ帝国—歴史と構造—』中央公論新社。
- 吉川 主浩
- 2025 「ペルー北高地、アンカシュ県コロongo郡の第1次踏査—トルナパンバ期研究の基盤形成に向けて—」『古代アメリカ』28: 99–109。
- (外国語文献)
- Acuto, Félix A.
- 2010 Living under the Imperial Thumb in the Northern Calchaquí Valley, Argentina. In *Distant Provinces in the Inka Empire: Toward a Deeper Understanding of Inka Imperialism*. Michael A. Malpass and Sonia Alconini (eds.), pp. 108–150. Iowa City: University of Iowa Press.
- Bernabé, Joseph
- 2017 La Ruta Inca a Los Huaylas. Estudio de la Vialidad Inca en La Pampa de Lampas-Choquerecuay, en el Departamento de Áncash, Perú. *Boletín del Museo Chileno de Arte Precolombiano* 22(2): 47–63, Santiago de Chile: Museo Chileno de Arte Precolombiano.
- 2023 Sistemas de depósitos o colcas en la provincia inca del Lurin Huaylas. En *Cuadernos del Qhapaq Ñan: Año 8, número 8, 2022*. Luís Elías Lumbreras Flores y Sergio Barraza Lescano (eds.), pp. 92–124, Lima: Ministerio de Cultura del Perú.
- Casanovas, Claudia Rivera
- 2010 Forms of Imperial Control and the Negotiation of Local Autonomy in the Cinti Valley of Bolivia. In *Distant Provinces in the Inka Empire: Toward a Deeper Understanding of Inka Imperialism*. Michael A. Malpass and Sonia Alconini (ed.), pp. 151–172. Iowa City: University of Iowa Press.
- Chirinos Portocarrero, Ricardo y Nilton Ríos Palomino
- 2018 La presencia inca en la quebrada de Tambillos, una mirada desde Inca Naani y el Ushnu de Soledad de Tambo, *Cuadernos del Qhapaq Ñan: Año 5, número 5, 2017*. Giancarlo Marcone Flores y Sergio Barraza Lescano (eds.), pp. 32–47, Lima: Ministerio de Cultura del Perú.
- D’Altroy, Terrence N.
- 2015 *The Incas. 2nd Edition*. Oxford: Wiley Blackwell.
- Dean, Carolyn
- 2010 *A Culture of Stone: Inka Perspectives on Rock*. Durham and London: Duke University Press.
- Espinosa Reyes, Ricardo
- 2002 *La Gran Ruta Inca: El Qhapaq Ñan*, Lima: Petróleos del Perú.
- Espinoza Soriano, Waldemar
- 2013[1974] El Curacazgo de Conchucos y la Visita de 1543. In *Cien Años de la Arqueología en la Sierra de Ancash*. Bebel Ibarra Asencios (ed.), pp. 545–565. Huarí: Instituto de Estudios Huarinos.
- Gasparini, Graziano and Luise Margolies
- 1980[1977] *Inka Architecture*. Patricia Ryon (tr.). Bloomington and London: Indiana University Press.
- Grosboll, Sue
- 2013 ...And He Said in the Time of the Ynga, They Paid Tribute and Served the Ynga. In *Provincial Inca: Archaeological and Ethnohistorical Assessment of the Impact of the Inca State*. Michael Andrew Malpass (ed.), pp. 44–73. Iowa City: University of Iowa Press.
- Guaman Poma de Ayala, Felipe
- 1980[1615] *Nueva crónica y buen gobierno Tomo II*, Caracas: Biblioteca Ayacucho.
- Hyslop, John.
- 1984 *The Inka Road System*. Orland: Academic Press.
- 1990 *Inka Settlement Planning*. Austin: University of Texas Press.
- Instituto Nacional de Cultura del Perú
- 2004 Macro Región Centro Marco Geográfico. In *Proyecto Qhapaq Ñan. Informe de Campaña 2002–2003*, Lima: Instituto Nacional de Cultura del Perú.
- Kattia, Victorio
- 2019 Tecnología y Función en el Sitio Arqueológico de Huaritambo-Huari-Ancash. Tesis para optar título de Licenciada en Arqueología. Huaraz: Universidad Nacional Santiago Antúnez de Mayolo.
- Kendall, Ann
- 1985 *Aspects of Inca Architecture: Description, Function and Chronology*. Oxford: B. A. R.
- Lau, George F.
- 2016 *An Archaeology of Ancash: Stontes, ruins and communities in Andean Peru*. New York, London: Routledge.

- 2019 An Inca Offering at Yayno (North Highlands, Peru): Objects, Subjects and Gifts in the Ancient Andes, *Cambridge Archaeological Journal* 29(1): 159–179. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lau, George F. and Milton Luján Dávila, Jacob I. Bongers, David Chicoine  
2023 The Rise of Native Lordships at Pashash, a.d. 200–600, North Highlands of Ancash, Peru, *Journal of Field Archaeology* 48(1): 36–54. New York, London: Routledge.
- Lau, George y Steven Wegner  
2023 *Museo Arqueológico Zonal de Cabana: Una guía breve*. Cabana: PIARP 2023.
- Lippi, Ronald D. and Alejandra M. Gudiño  
2010 Inkas and Yumbos at Palmitopamba in Northwestern Ecuador. In *Distant Provinces in the Inka Empire: Toward a Deeper Understanding of Inka Imperialism*. Michael A. Malpass and Sonia Alconini (ed.), pp. 260–278. Iowa City: University of Iowa Press.
- Moore, Jerry D.  
2021 *Ancient Andean Houses: Making, Inhabiting, Studying*. Gainesville: University Press of Florida.
- Morris, Craig and Donald E. Thompson  
1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and its Hinterland*. New York: Thames and Hudson.
- Pärssinen, Martti  
1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization*. Helsinki: Societas Historica Finlandiae.
- Rossen, Jack, María Teresa Planella and Rubén Stehberg  
2010 Archaeology of Cerro del Inga, Chile, at the Southern Inka Frontier. In *Distant Provinces in the Inka Empire: Toward a Deeper Understanding of Inka Imperialism*. Michael A. Malpass and Sonia Alconini (ed.), pp. 14–43. Iowa City: University of Iowa Press.
- Schreiber, Catharina  
2013 The Inca Occupation of the Province of Andamarca Lucanas, Peru. In *Provincial Inca: Archaeological and Ethnohistorical Assessment of the Impact of the Inca State*. Michael Andrew Malpass (ed.), pp. 77–116. Iowa City: University of Iowa Press.
- Tantaleán, Henry y Carmen Pérez Maestro  
2004[2003] Pueblo Viejo: un centro administrativo Inca en el Callejón de Huaylas. In *Arqueología de la Sierra de Ancash: Propuestas y Perspectivas*, Bebel Ibarra Asencios (ed.), pp. 445–456, Instituto Cultural RVNA, Lima.
- Terada, Kazuo  
1979 *Excavations at La Pampa in the north highlands of Peru*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Topic, John R. and Theresa Lange Topic  
2013 A Summary of the INCA Occupation of Huamachuco. In *Provincial Inca: Archaeological and Ethnohistorical Assessment of the Impact of the Inca State*. Michael Andrew Malpass (ed.), pp. 17–43. Iowa City: University of Iowa Press.